

教員によるエッセイ

『本と過ごす場所』

電車に乗っていると乗客のほとんどがスマホを触っています。シンクロしたように同じ角度に傾いた顔の並ぶ光景は何となくユーモラスです。その中で私は1冊の本を握りしめています。いまや少数派でしょうか。

ここ数年、兵庫県と岡山県、香川県、愛媛県を1週間の間は何度も行き来する生活をしていました。おそらくJRには随分貢献したと思います。さて、そんな移動生活の中、私は必ず文庫本を持って電車に乗ります。本の中身は、運ぶのに重い文芸書や難しい専門書などではなく大好きな推理小説です。東野圭吾、宮部みゆき、湊かなえ、京極夏彦、道尾秀介……皆さんにもお馴染みの作家です。1ヶ月で15冊読んだこともありました。そんなに多く読むなら電子書籍にすればと言われたこともあります。電子媒体では味わえない本の重みやページをめくる感触が好きです。そして、車内での読書が大好きです。外からは遮断され、目的地に着くまでは何もできないという空間（電車）は別の世界に入り込む集中力を与えてくれます。

スマホではなく本。私が車内で本を読むのは現実逃避です。現実逃避というと消極的態度にも聞こえますが、日

一般教育科
長原 しのぶ



常の何もかもを一旦全て忘れて物語の世界に入り込むことは私にとって究極の癒やしです。とくに移動の多かった時期は精神的にも肉体的にも疲れてしまい、何か失敗した後の落ち込む気持ちを切り替えることが難しい状態でした。車内読書はあの頃の私の精神安定剤であり、明日への活力だったといえます。

読書というと「何を読む？」ということを考えがちですが、実は「どこで読む？」ということも大事なのではないのでしょうか。どんなに面白く自分にとって為になる内容であっても、文字が上滑りするようにただ流れるだけでは無駄な時間を過ごしたとしか思えません。短時間でも雑念を取り払い、本の世界に没頭できる環境が必要です。私の場合、その場所はたまたま電車でした。本来なら1秒でも縮めたい電車移動ですが、本と過ごす空間だと意識するともう少しこのまま乗り続けたいと思えるほど居心地のよい空間となりました。

本と向き合う場所は人それぞれでしょう。教室、図書館、カフェ、自室、お風呂、トイレ、と色々考えられます。皆さんもどこか一つそんな場所を見つけてみてください。また違った形で本と付き合えるかもしれません。



教員・学生による推薦図書

※推薦図書は図書館で貸出できます。

教員〈高松〉

ヒゲのウキスキー誕生す

▶川又 一英〈新潮文庫〉

北海道の余市にあるニッカの醸造所に行ったことがある。本当に美しく気持ちのいいところで、ああ、ここならおいしい酒が出来るねと思った。この本はニッカ創業者の竹鶴政孝とリタ夫人の物語。二人は朝の連続テレビ小説「マッサン」のモデルである。便乗した本が沢山出ているけどこれが一番ですよ、と東京のさるバーテンダーが薦めてくれた。ウキスキーの鬼のような竹鶴と、凜としてそれに寄り添うリタ夫人の美しい人生。絶対にドラマよりいいと思う。

一般教育科教員 高橋 宏明

技術者たちの敗戦

▶前間 孝則〈草思社文庫〉

この本では戦中・戦後にかけて活躍した6人の技術者たちの生涯が紹介されています。零戦の生みの親の堀越二郎、新幹線生みの親の島英雄、ホンダのF1チームのリーダーだった中村良夫などです。いずれも大きな仕事を成し遂げたカリスマ技術者たちですが、その生涯は様々です。社内で“根堀り越し、葉堀り越し”とあだ名されていた堀越二郎、自分の直感に執着して技術の進歩から取り残されていた本田宗一郎など興味深い話が盛りだくさんです。ここに紹介された技術者たちの生き様は、技術者としての長い人生をこれから歩み始めるみなさんの参考になるとと思います。

機械工学科教員(副校長) 橋本 良夫

鳥人計画

▶ 東野 圭吾 (角川文庫)

東野圭吾といえば超がつくほどの人気ミステリー作家であり、私も近年刊行されたほとんどの作品を読んでいる。中でもここで推薦する作品は推理小説としての論理展開の面白さに加え、スキージャンプでどうやったら遠くに飛べるかという工学的な理論解説があることが魅力である。最初書店で手にとってパラパラめくったとき「何で推理小説なのにグラフが出てくるのか？」と意外に思ったのが読むきっかけだったが、結局徹夜して読んでしまった。最近「すべてがFになる」など理系の人を読むと一層面白みが増すものも話題になっており、改めてこのような分野の本を手にとってみてはいかがでしょうか。

電気情報工学科教員 本田 道隆

剣道をする早苗。全く対照的な二人が巻き起こすエンターテインメント。対照的だからこそ悩んだり葛藤したりして、剣道はもちろん心身ともに成長していく二人の姿を見ることが出来ます。性格や考え、剣道は違いますが、目指すものは同じというなんとも不思議なストーリーです。剣道知らない方でもスポーツ青春ストーリーなので気軽に読めると思います。菅田哲也さんの武士道シリーズ一冊目。是非読んでみてください。

機械工学科2年 谷本 百合菜

ファンタジーを読む

▶ 河合 隼雄、河合 俊雄 [編] (岩波書店)

みなさんはファンタジーと聞くと、子供のものだと感じたり、どうせ夢物語だと感じるかもしれません。ですが、ファンタジーは妄想とは違います。ファンタジーには、創作した人の何らかの意図がこめられています。そして、そんなファンタジーを忘れがちである成長した人たちにこそ、読んでもらいたいと思います。

この本は、心理療法家である著者がファンタジーについてどう考えているかと、著者のオススメのファンタジーが載せられています。著者は、「ファンタジー文学は空想への逃避ではなく、時に現実への挑戦ですらある。」と述べています。ファンタジーがどうして心理療法に関係あるのか、ファンタジーと現実の違いとは何か。現実的な話もいいけど、ちょっと普段とは違う不思議な話も読んでみたいなという方はぜひ一度手に取って見てください。

電気情報工学科3年 山口 晃生

いまさら聞けない長年の大疑問
日本の歴史 ハテ、そういえば…?

▶ 日本の歴史の謎を探る会 (河出書房新社)

江戸時代の町奉行大岡越前守は本当に越前(福井県東側)を治めていたのか?江戸時代に○○藩という地域名は存在しなかった?この本を読めば今までドラマや映画から学んだ歴史の知識が実は間違いだったことを発見できるでしょう。1~2ページずつの小話としてまとめられた本なので、歴史が苦手な人にも読みやすいと思います。秋の夜長のお伴に是非どうぞ。

機械電子工学科教員 相馬 岳

アユを育てる川仕事

▶ 古川 彰、高橋 勇夫 (築地書館)

アユは“清流”のシンボルとして扱われることが多い魚ですが、水質のみを改善してもアユが育つ川にはなりません。アユは1年という短い生涯の中で、河川と海を行き来します。つまりアユが生息するには、魚道(堰やダムに設置する水生生物の通り道)などの整備により、河川全体の移動環境が整っていることが重要なのです。本書には、漁業協同組合、一般市民、行政が一体となって取り組む河川整備の事例が紹介されており、環境保全に関わるエンジニアを目指す学生にとって良い参考になると思います。

建設環境工学科教員 高橋 直己

空想科学読本

▶ 柳田 理科雄 (東京メディアファクトリー)

高専生になってから、物事を科学的、力学的に考えるようになった人は多いのではないかと。僕もその1人だ。高専で毎日技術系の勉強をしているとこうなる。あと高専生はマンガ、アニメが好きな人が多いと思う。そんな高専生に、ぴったりの本をご紹介します。空想科学読本である。この本は、アニメやマンガの必殺技や人智を超えた技や場面、などを柳田理科雄さんが、分かりやすく、今の科学で説明してくれる本だ。読めば、君も柳田ワールドの虜になるであろう。

建設環境工学科3年 清田 成毅

死神の精度

▶ 伊坂 幸太郎 (文藝春秋)

人間の世界に派遣され、千葉の名前で仕事をする死神を中心とした物語です。6つの短い物語に分かれていてとても読みやすいです。それぞれの物語が面白いので普段本を読まない人でもすぐに読んでしまいます。なのでぜひ、最後まで読んでみてください。思わず笑顔になるような爽快感が味わえるはず。読み終えた後の心地よい余韻まで楽しめる作品だと思います。伊坂作品の特長は登場人物のセリフの軽妙さと伏線回収の美しさだと思います。実際に手に取って読んでみてください。

電気情報工学科4年 岡田 修一郎



学生 (高松)

武士道シックスティーン

▶ 菅田 哲也 (文春文庫)

剣道一途な香織と勝ち負けにこだわらず、お気楽不動心な